

新版「国語」教科書

新しい教科書では、これまで以上に、さまざまな工夫をしています。

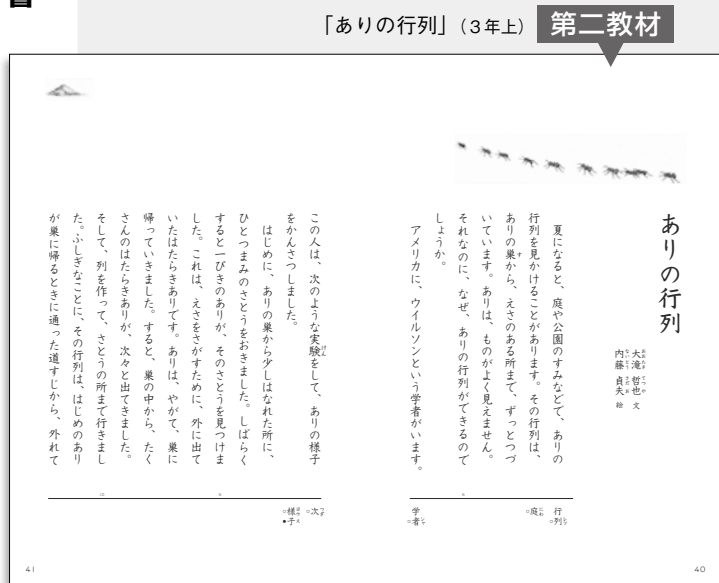
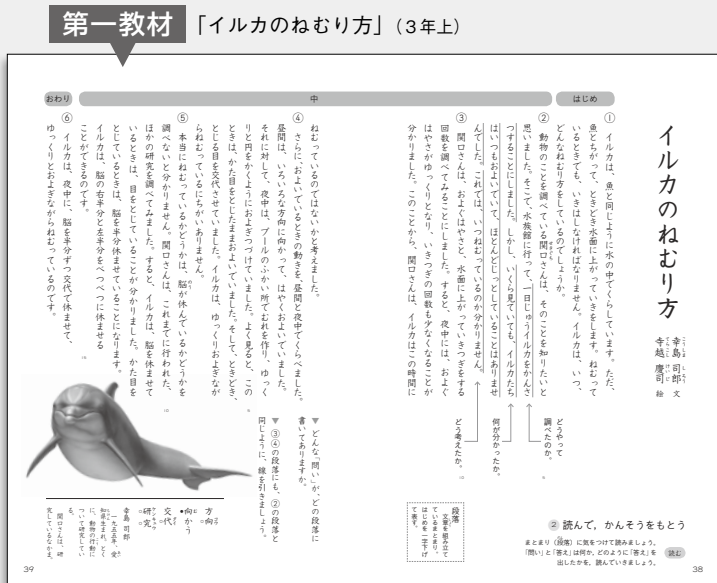
先生方からいただいたご質問に答えるかたちで、その工夫の一部をご紹介します。

A 「活用力」を育てるために、どのような工夫をしていますか。

Q 大きく三つの工夫があります。①説明文二教材構成という単元を設けました。②「読むこと」単元で習得した知識を「書くこと」単元に活用できるように工夫しました。③国語科で学習したことを他教科や日常生活に生かせるよう、随所に工夫を施しています。

① 説明文二教材構成

三年生以上の上巻に、説明文を二つ並べた単元を設けています。第一教材はすべて見開き二ページです。第一教材を学習した後には第二教材を学習することで、「習得」から「活用」までの流れをスムーズに図ることができます。



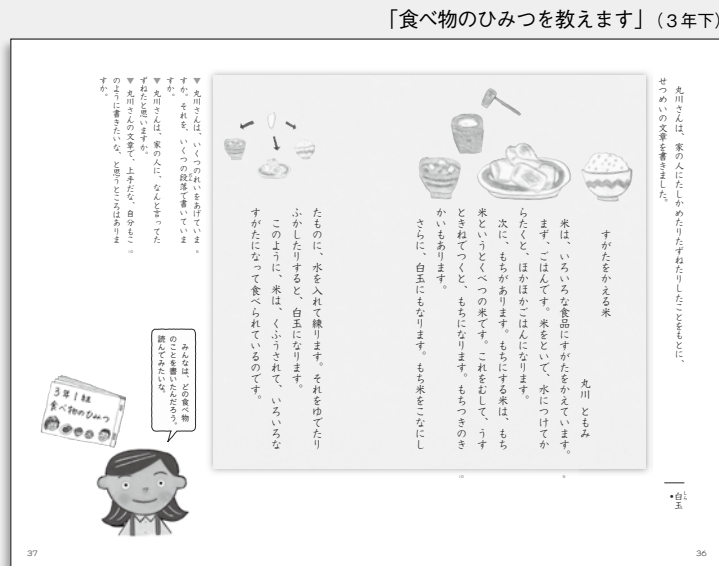
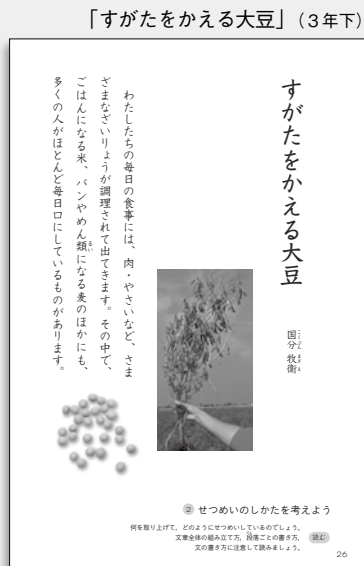
第一教材「イルカのねむり方」で、

- 段落
- 構成（「はじめ・中・おわり」）
- 「問いと答え」

という知識と読み方を習得し、第二教材「ありの行列」では、その学習を活用して学ぶ。

②「読むこと」から「書くこと」へ

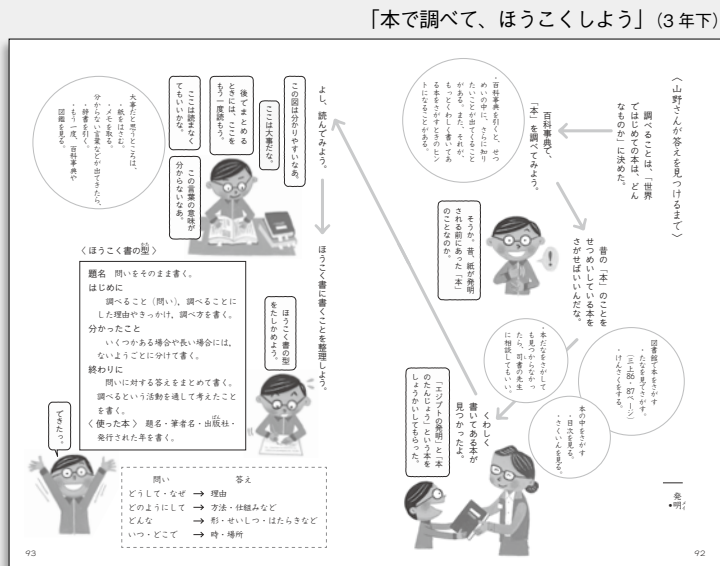
「読むこと」単元で習得した知識を、「書くこと」単元で自ら書くために活用できるように、工夫しています。



「すがたをかえる大豆」で、例を挙げて説明するなどの、筆者の説明のしかたについて学ぶ。そこで学習したことを使って、次の単元「食べ物のひみつを教えます」で、説明する文章を書く。

③ 他教科へ、日常生活へ

国語科で学んだ知識・技能、思考を支える手立てを、他教科の学習や日常生活に生かせるようにしています。



本を使って調べたり、調べたことを報告書にまとめるという、他教科でも生かせる問題解決の方法を、詳しく示している。

A 言語活動を通して国語の力を身につけさせるため、どのような工夫をしていますか。

Q 単元冒頭に言語活動と学習内容を明示しました。また、言語活動の手順をわかりやすく示したり、手引きを構造化したり、「たいせつ」で身につける力を明確にしたりしています。

「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」がとらえやすいよう、単元冒頭に言語活動と学習内容を明示しました。

「話すこと・聞くこと」「書くこと」の単元では、冒頭に活動の流れを示し、作例や発表例なども多く示しました。手順がわかり、子どもたちが見通しをもつて学習することができるよう工夫しています。

また、「読むこと」の単元では、手引きを構造化しました（左ページ参照）。

これらの工夫により、言語活動をよりスムーズに行うことができ、「読む力」「話す・聞く力」「書く力」を着実に身につけさせることができます。

手引きを構造化

2 言語活動の手順や留意点

(3年上 P20)

▼「1」「2」のどちらかの場面をえらび、れんしゅうして、グループごとにはつびょうしましょう。

ぼくたちのグループは、「1」の場面を音読しよう。だれが、どのぶぶんを音読するのがいいかな。

わたしが読むところに、読み方を書きこんでおこう。

音読でようすのちがいをあらわすときは、つぎのことに気を付けよう。

- ・強く読むところと、弱く読むところを考える。
- ・読むはやさや、声の高さをかえる。
- ・とくに聞いてほしい言葉の前や後で、少し間をとる。

▼友だちの音読を聞いたら、よかったところをつたえ合いましょ。友だちのかんじやあらわし方は、あなたのと同じでしょう。か、ちがうでしょう。

☆あなたなら、「きつつき」にどんな音を聞かせてもらいたいですか。それは、どんな音でしよう。

●音読
●聞きか
●動き

「たいせつ」それぞれの単元で、習得すべき知識・技能を整理。

1 しっかり読むための手引き

(3年上 P19)

★音読しよう

登場人物がしたこと		
場所・天気などのようす	1	2

「きつつきの商売」という物語は、「1」と「2」の二つの場面に分かれています。それぞれの場面のようすを、どのように音読してあらわすのかがいいか、考えましょ。

□二つの場面をくらべてましょ。

▼「1」と「2」に書かれていることを、ノートに書き出して、ちがいをみつけましょ。

▼「1」と「2」には、それぞれ、つぎのような音が出てきます。なんの音でしよう。

どのように音読するのがいいでしよう。

「1」……コーン。

「2」……シャバシャバシャバ。バリバリバリ。ドウドウドウ。ザワザワザワ。

「1」では、きつつきと野うさぎが、だまって聞いていたよね。じつとじつと聞いていた音で、どんなかんじだろう。

「2」では、雨がふっているんだよね。強い雨かな、弱い雨かな。森にふる雨と、町にふる雨はちがうのかな。

19

脚注
国語科における学習用語を抽出して解説。

「きつつきの商売」(3年上 P8) 「読むこと」の第一単元

きつつきの商売

林原 五枝 作
村上 康成 絵

きつつきが、お店を開きました。それはもう、きつつきにぴったりのお店です。きつつきは、森じゅうの木の中から、えりすぐりの木を見つけてきて、かんばんをこしらえました。かんばんにきざんだお店の名前は、こうです。おとや

1 音読しよう

いつ、どこで、どんなできごとがおきるのてしよう。そのとき、まわりは、どんなようすてしよう。

読む

この単元で取り組む言語活動を明示。これは児童の活動目標になる。

1 音読しよう

いつ、どこで、どんなできごとがおきるのてしよう。そのとき、まわりは、どんなようすてしよう。

言語活動を通して学習すべき内容

1 音読しよう

いつ、どこで、どんなできごとがおきるのてしよう。そのとき、まわりは、どんなようすてしよう。

読む

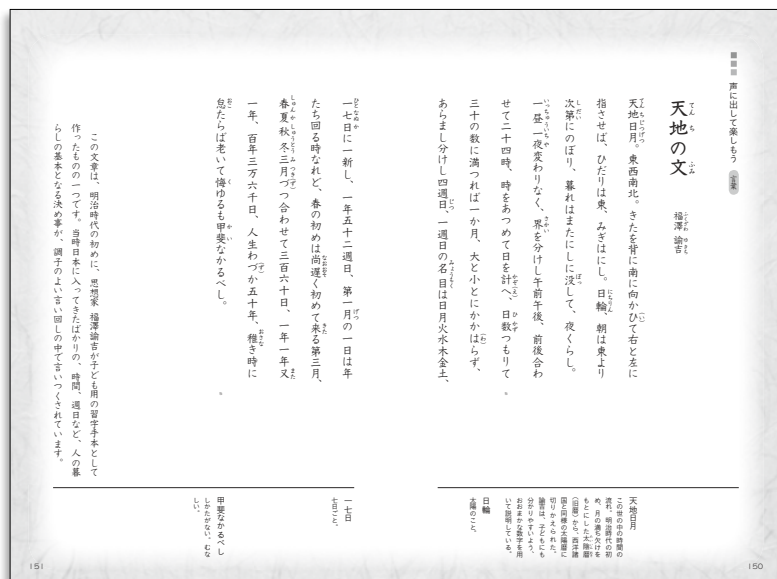
A 「伝統的な言語文化」の扱いはどのようになっていきますか。

Q 短歌・俳句や古文・漢文などを音読し暗唱する教材を、三年以上に設けました。また、民話や昔話を聞いて楽しむ教材を、一〜六年まで系列化して位置づけました。他にも、「季節の言葉」を新設したり、巻末資料として伝統的な言語文化に関する教材を掲載したりしています。

子どもたちが伝統的な言語文化に親しめるよう、多様な教材を掲載しています。

三年以上の各学年二か所に「声に出して楽しもう」を設けました。声に出して唱えることで、日本語の響きやリズムを体で感じてほしいと願っています。三・四年では短歌・俳句、五年には論語、六年には近代以降の文語調の文章として「天地の文」（福澤諭吉）を掲載しました。

「天地の文」（6年）



「声に出して楽しもう」

▼三年

・俳句（松尾芭蕉・与謝蕪村・小林一茶）

・短歌（良寛・百人一首）

▼四年

・俳句（小林一茶・与謝蕪村・松尾芭蕉・正岡子規・高浜虚子・中村汀女）

・短歌（光孝天皇・山部赤人・蟬丸・石川啄木・与謝野晶子・佐佐木信綱）

・「竹取物語」

・「枕草子」

▼五年

・「平家物語」

・「論語」

・「天地の文」（福澤諭吉）

▼六年

さらに、六年には「伝統文化に楽しもう」として、狂言「柿山伏」を、山本東次郎氏の解説とともに位置づけています。音読に楽しみ、かつ昔の人のものの見方・考え方を知り、考えることができます。

また、語りが継がれてきた民話や昔話を聞いて楽しむ教材を「聞いて楽しもう」として、一年から六年まで系列化して位置づけました。滑稽な話、スリル満点な話、落語、怪談、しみじみとした民話など、思わず聞

き入ってしまうお話を発達段階に応じて掲載しています。豊かな語りの文化にふれることで、言葉の力の素地を築いてほしいと考えています。

「聞いて楽しもう」

▼一年

・「まのいいりようし」

（稲田和子・筒井悦子）

▼二年

・「いなばの 白つぎ」（中川李枝子）

・「三まいのおふだ」（瀬田貞一）

▼三年

・「はけくらべ」（松谷みよ子）

▼四年

・「額に柿の木」（瀬川拓男）

▼五年

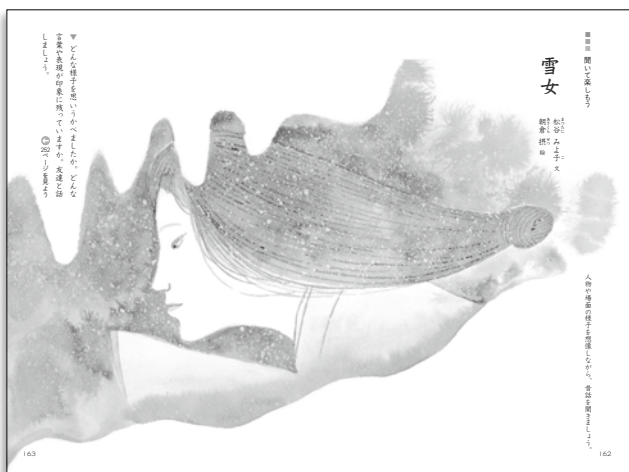
・「雪女」（松谷みよ子）

▼六年

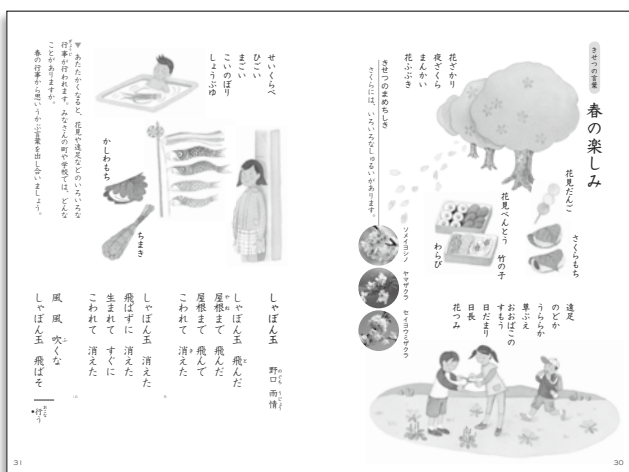
・「河鹿の屏風」（岸なみ）

古来脈々と受け継がれている、四季折々の美しい言葉を「季節の言葉」として、二年生以上の各学年で「春・夏・秋・冬」の年間四か所に位置づけました。季節にまつわるさまざまなものの絵や写真、言葉を示しました。また、唱歌・短歌・漢詩なども

「雪女」（5年）



「季節の言葉」（3年上）



他にも巻末資料として、伝統的な言語文化に関する教材を掲載しています。

▼三年 「百人一首を楽しもう」

▼四年 「知ると楽しい『故事成語』」

▼五年 「古典の世界―『高名の木登り』」

▼六年 「古人のおくり物―狂言・落語」

など。

A 「読書」に親しむために、どのような工夫をしていますか。

Q 大きく三つの工夫があります。

- ①教科書のあらゆる箇所で、たくさんの本を紹介しています。
- ②本や図書館を活用するさまざまな活動を提案しています。
- ③「本」「読むこと」「そのものについて考えること」を促しています。



「この本、読もう——本は友だち」(3年下)
付録として、多様なジャンルの本を紹介した図書リストを位置づけている。6年間で紹介している本は400冊を超える。

「読書が好きな子」「必要に応じて読書できる子」になってほしい、そう願いました。
そのために、いつも身近なところに本がある、学習の中に、また学習の続きに本があるという状況を作ろう、教科書のあらゆるところに本があるようにしようと考えました。
従来に比して格段に増えた教材の作成にあたっては、外国の教科書、各地の学校図書館や司書の先生の取り組み、読書活動の実践などを参考にさせていただきました。

次の教材は、お二人の先生のご実践を基にして生まれました。

- 「むかしばなしが いっぱい」(1年)
西宮市立広田小学校司書教諭(当時) 曲里由喜子先生(現帝塚山学院大学非常勤講師)
- 「わたしたちの『図書館改造』提案」(5年)
川崎市立天蔵中学校教諭(当時) 杉本直美先生

A なぜ五・六年を学年一冊の合本形式にしたのですか。

Q 高学年の子どもたちには、主体的に教科書を使いこなして学習してほしいと願ったからです。

発達段階から考えて、高学年では、教科書を主体的に使いこなして学習することが十分可能です。

子どもたちが一年間の学習を見通したり振り返ったりすることができよう、学年一冊の合本にしました。

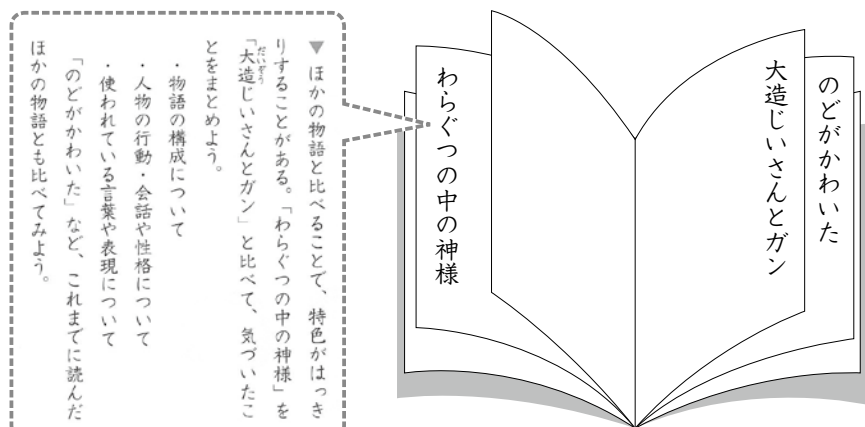
巻頭には「学習の見通しをもとう」というページを設けました。子どもたちが、自分がどんなことを学ぶのか、一年間の学習を見通すことができます。

また、合本になったことにより、教科書を行ったり来たりしながら、前に学習したことを振り返って参考にしたリ、教材そのものを比較したりするという学習ができます。

学習の見通しをもとう			
話す・聞く	書く	読む	言葉
○ 物語人物について、自分の考えを述べよう。 ○ 説明文の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 論議の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 説明文の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 論議の構成について、自分の考えを述べよう。	○ 物語人物について、自分の考えを述べよう。 ○ 説明文の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 論議の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 説明文の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 論議の構成について、自分の考えを述べよう。	○ 物語人物について、自分の考えを述べよう。 ○ 説明文の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 論議の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 説明文の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 論議の構成について、自分の考えを述べよう。	○ 物語人物について、自分の考えを述べよう。 ○ 説明文の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 論議の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 説明文の構成について、自分の考えを述べよう。 ○ 論議の構成について、自分の考えを述べよう。

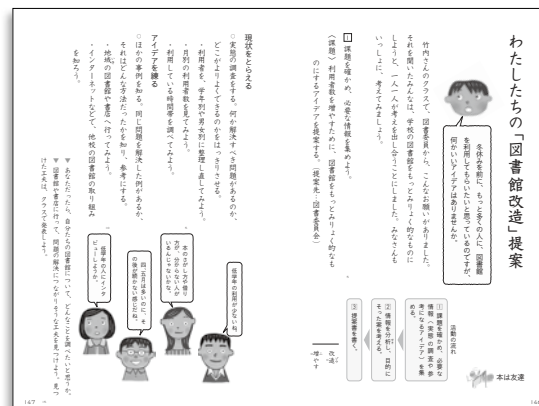
1年間に学習する内容を示している。

「学習の見通しをもとう」
(5年 P6-7)

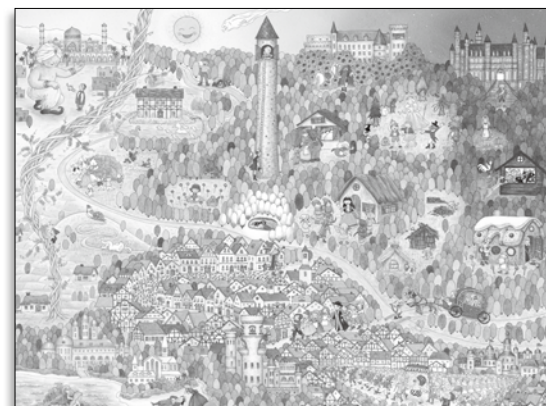


「わらぐつの中の神様」の手びき
(5年 P210)

教科書を行ったり来たりしながら、前に学習したことを振り返って、参考にする、教材そのものを比較するという学習ができる。



「わたしたちの『図書館改造』提案」(5年)
「学校の図書館をもっと魅力的にし、利用人数を増やす」という課題を設定し、必要な情報を集めて分析し、提案書を書くという教材。



「むかしばなしが いっぱい」(1年下)
絵の中から、知っているお話を見つけて、友達と交流する教材。

1 どんなお話にしようかな

使用教材：「お話のさくしやになろう」（二年上）

1 はじめに

学習指導要領の第一学年及び第二学年「B 書くこと」内容（1）イに、「自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること」とある。構成を考えるというのは、あらかじめどんな話の筋にするのかを考えることといえる。自分で考えた話の筋をもとに楽しみながら物語を書くことをこの単元では重視していきたい。

教科書を開くと、【はじめ】【おわり】の挿し絵が描かれており、【中】は空白である。この空白が、児童の創作意欲をふくらませ、楽しく想像を広げるきっかけとなる。そして【中】の部分をもとに構成し、前後とどうつなげて物語を作るかが、ねらいに迫る学習活動となる。

事柄の順序を考え、書き始める際に生かしたいのが、教科書P 62にある書きだしの工夫のアドバイスだ。これらの多様な表現にふれさせ、自分で作る物語に生かせるようにしていきたい。

2 指導計画（全八時間）

次ねらい	学習活動
一 どんなお話をどんな順序に並べるか（簡単な構成）と、文章への広げ方を理解することができる。	① 出来事をどう並べるかを共通の題材（「すべて池におちる」の前後をどうするか）で考え、書き方のひみつを探る。 ② 前時に考えた構成をもとに、つながりのある文章にするにはどうすればよいかを考える。
二 自分が作る物語の構成を考え、文と文とのつながりに気をつけて、物語の文章を書くことができる。	① どんなお話にしたいか（設定）、物語らしい出来事の順序（構成）を考える。考えたことを友達とペアで話をしながら、物語をふくらませていく。 ② 書きだしに気をつけて【はじめ】を書く。 ③ 会話文などを工夫しながら【中】を書く。 ④ 全体のつながりを考えながら【おわり】を書く。 ⑤ 推敲し、清書する。
三 友達の作品のよさに気づくことができる。	① 友達と作品を読み合いよいところを見つけて感想を伝え合う。

たのかという後の出来事をここで考えさせる。

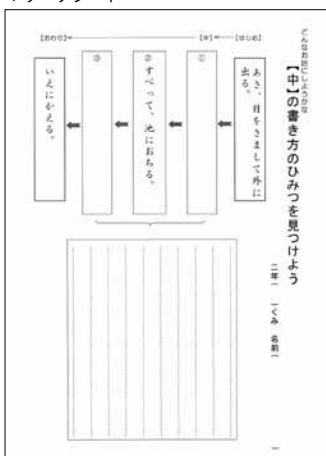
② 三人グループで交流する。「前後のつながり」という視点でアドバイスし合い、自分の考えを修正する。

前後につながりをもたせる出来事があれば物語らしくなる、ということを助言しながら進めていく。

③ どのような順序でどのような出来事を並べればよいかを全体で話し合う。

出来事の並べ方は、出来事の内容のつながりにも気をつけなければならない。例えば、池に落ちる前の出来事は、「池の方に散歩に出かけた」などの次の出来事にかかわる内容でありたい。この場面では、「つながり」「じゅんじよ」などの言葉を児童から引き出して「書き方のひみつ」のまとめにつなげる。

▼ワークシート



④ 「ひみつ」をまとめる。

③の全体の話し合いの中で出てきた言葉をキーワードに、「ひみつ」としてまとめさせる。児童からは次のような「ひみつ」が挙げられた。

- ・出来事の中身がつながるように。
- ・出来事の順序が大切。
- ・他の登場人物を出す。

次時では「書き方のひみつその二」として、文章全体に目を向け、どのような文章をつなげるひみつがあるのかを考えさせる。

4. 本時を振り返り、次時への見通しをもつ。（五分）

4 おわりに

「構成」と聞くと低学年には難しそうな気がするが、そこは簡単に「出来事の順序」と考えてみればどうだろう。

自分で物語を作るにあたって、初めは突拍子もない出来事を考え出すかもしれないしかし、出来事のつながりの意味と順序の大切さがわかり始めれば、楽しい物語の流

3 指導の実際（第一次①）

●ねらい…出来事の並べ方を考えることを通して、物語を作るのに必要な構成のしかたを理解する。

●学習活動

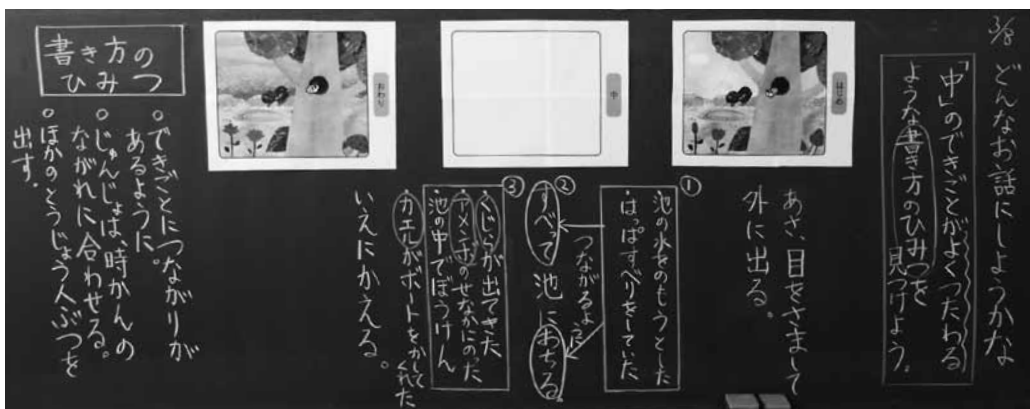
1. これまで学習してきた物語教材を振り返る。（三分）
2. 本時のめあてを確かめる。（二分）

「中」のできごとがよくつたわるような書き方のひみつを見つけよう。

3. 教科書の挿絵（P 60）をもとに出来事の並べ方を考える。（三十五分）

① P 61の「すべて池におちる」を【中】の共通の題材に設定し、前後の出来事をつなぐに気をつけながら考えワークシートに記入する

「朝、起きました。池に落ちました。家に帰りました。」だけではストーリーが展開しているとはいえない。何があって池に落ちたのかという前の出来事と、池に落ちて何があっ



▲板書例

2 聞き上手は話し上手

使用教材：「よい聞き手になろう」（三年上）

新しい指導を考える会

1 はじめに

対話が「話し手」と「聞き手」の協力によって成り立っていることに気づき、「よい聞き手」とは何かを体験を通して考えることをこの授業を通して目指した。

▼繰り返すことで相手を意識して聞く力を高める。

「話す・聞く」の学習は、国語科のみならず、他教科や日常生活で生きてこそ、その意味が見出される。そこで、国語科の学習で知識・技能を身につけ、それが「使える」ようにするために、年間を通して話し合いの場を設けた。朝の会では、「わいわいタイム」と称してグループごとに話し合いを行う。四～五人のグループで毎週一度は話し手、それ以外の日は、よい聞き手となって質問や感想を述べる機会をつくった。

▼振り返りの場の充実で身につけた言語能力を自覚させる。

学習をもとに考えたよい聞き手の観点をもとに振り返りを行う。自分の感想や質問をした表現に目を向けることは、身につけ

た力の自覚と次への意欲、新しい課題につながる。

2 指導計画（全四時間）

時 ねらい	主な学習活動
一 日常の中にある多様な聞き方を集め、分類することができる。	● 日常にある多様な聞き方を分類する。 ・「相手を聞く」：話し手の長所に着目して聞く。 ・「内容を聞く」：話の中心に着目して聞く。 ・「自分を聞く」：自分と比べて同じところ、違うところに着目して聞く。
二 二対一で対話を行い、話の中心に気づいて聞き、質問したり感想を述べたりできる。	● P32の「しつもん」のよいところを考える。 ・P34「きちんとつたえるために」から分りやすいしつもんをするために大切なことを話し合う。
三 二対一で対話を行い、話の中心に気づいて聞き、質問したり感想を述べたりできる。	● 二対一で対話を行い、聞き手は、話の中心に気づいて聞き、質問をする。 ● 観点をもとに聞き手としての自分を振り返る。

3 指導の実際（第二時）

二対一で対話を行い、話の中心に気づいて聞き、質問したり感想を述べたりできる。

■指導書の付録CDで、対話を聞く。

（P32・P33）

四 よい聞き手になるための大切な聞き方がわかる。	● P33の「かんそう」のよいところを考える。 ● 二対一で対話を行い、聞き手は、話の中心に気づいて聞き、質問したり感想を述べたりする。 ● グループで話し手や聞き手になり、聞き手は、話の中心に気づいて聞き、質問をしたり感想を述べたりする。 ● 観点をもとに聞き手としての自分を振り返る。
--------------------------	---

・クラスの「わいわいタイム」を想起させて聞かせる。

・よいところやこうしたらもっとよくなることを考える。

■よい聞き手になって質問や感想を話す。
・二対一で対話を行い、聞き手は、話の中心に気づいて聞き、質問をする。

・場の工夫を行い、繰り返し多くの子と話ができるようにする。

・話題は、教科書P36の「話題例」や、そ

のときのクラスの問題となり得る出来事などから決める。
・時間を区切り、話し手の内容は、五分程度で話すこととする。

■観点をもとに振り返りを行う。

本学級で話し合って決めた「よい聞き手の観点」は次の通りである。

● 内容を聞く	・話し手が話したいことに沿った質問をする。 ・ほかの聞き手のためになる質問をする。
● 自分を聞く	・自分だったらと考えて感想を言う。 「ほくだったら…」「わたしも…」 ・前の人が言ったことを受けて感想を言う。 「〇〇さんと同じで…だと思いました。」 「〇〇さんとは違って…だと思いました。」

4 おわりに

▼聞くことは考えること

中学年では、友達が話した内容に関連づけたり、分けたり（まとめる）して話すことができる思考力を育てたい。聞き手が、話し手が話したいことにそった質問をした

り、話し手の話を自分の知っていることや体験したことと比べながら聞いたりするためには、「考えながら聞く」ことが必要である。そのことに子どもたちが気づくことができるのが、本教材の価値だと感じた。

「考えながら聞く」ために大切な考え方がわかり、考える習慣がつくきっかけができたことが本単元での成果である。

▼日常生活に生きて働く力に高める

「話すこと・聞くこと」の指導は、年間を通して継続的・系統的に行われることで、子どもたちの日常生活に生きて働く力として高まっていくものだと考える。子どもたちは、ややもすると話すことに意識が向きがちであるが、話すことは、「受けて返す」ことが基本であることをしっかりと教えた。それが「聞き上手は話し上手」という単元名に込めた意味でもある。

三年生の子どもたちは、自分のことをたくさん話したいという思いをもっている。本学級の「わいわいタイム」はその願いに少しでも応えたいという思いから生まれている。そこに、本単元で身につけた「考えながら聞く力」を意識させ、一年間話し合わせてきた。毎日五分の継続が子どもたちに考えながら聞く習慣を育んできたといえるだろう。

3

筆者の考えを読み取り、要旨をまとめる

足利市立南小学校 内田仁志

使用教材：「見立てる」「生き物は円柱形」（五年）

1 はじめに

▼筆者の考えを読み取る

本単元は、筆者の主張したいことは何なのかを読み取って要旨をとらえ、自分の考えを深めることをねらいとしている。二つの教材を使って論理性を丁寧に取り組み、筆者の主張を理解させていきたい。

▼段落構成に着目する

論理展開を理解するためには、段落構成を理解することが必須である。それぞれの形式段落がどのような意味を持ち、文章全体を俯瞰した場合、どのような働きをしているのか、理解することが必要になる。

▼言語感覚に敏感になろう

段落にどのようなつながりをもたせているか、筆者の工夫を読み取るためには語句の意味に注意を払う必要がある。また、文末表現が疑問形か断定かで筆者の疑問か主張かが明らかになる、必ずそれらに注意して、段落構成を考えさせたい。

2 指導計画（全七時間）

第一時 「見立てる」を読み、文章構成

や例の挙げ方について考えながら、筆者の考えをまとめる。

第二時 学習計画を立てる。

第三時 「生き物は円柱形」を読み、共感・

第四時 段落構成に注意しながら、文章

構成をとらえる。特に接続表現に注意し、段落と段落のつながりを考えるようにする。

第五時 文章表現から筆者の論の進め方

についてグループで話し合い、メモにまとめる。

第六時 文章の要旨を百五十字程度にま

とめる。また、初めに書いた感想と比べながら、筆者の考えや文章の書き方について、自分の考えをまとめ、発表しあう。

第七時 学習の手引きの「言葉」（P48）

を読み、主語・述語の関係を確認し、文を結合・分解する練習をする。

3 指導の実際

「見立てる」では、文章全体を「始まり」「中」「まとめ」という三つの大きなまとまりに分けて読み取することを学習した。「生き物は円柱形」でも、まず全体を大きく三つに分け、それから形式段落がどのようなつながりをもっているのか考えてみたい。（丸付の数字は形式段落）

始まり ① 生き物には「形が円柱形だ」という共通性がある。 **筆者の考え**

中 ② 指もうでも足も首も胴体も円柱形だ。 **例一**

③ ミミズやヘビ、ウナギ、植物も円柱形だ。 **例二**

④ 例外もある。 **反論**

⑤ しかし、チョウも円柱形、木の葉や枝、木全体も円柱形といえる。 **反論の反論**

この単元では、要旨は百五十字以内でまとめるように指示されている。その字数でまとめるには例が示されている段落②から⑤を省略し、さらに⑥から⑨の文章を簡略化するとよいだろう。

4 おわりに

要旨は筆者の一番主張したいことをまとめたものである。そこには読み手の感想は入れてはいけない。あくまでも文章の論理構成から筆者の主張を、まとめるよう注意したい。

この文章の論理性を読み解き、要旨をまとめさせることは、今後、児童が自分の考えをまとめる際にも大いに役立ち、また、論理的な文章を書くための一助となるだろう。

まとめ

⑩ 円柱形は強くて速い。だからこそ生き物の体の基本となっているのである。

筆者の結論

⑪ 多様なものから共通性を見いだし、なぜ同じなのかを考えることもおもしろい。

筆者の考え

▼要旨をまとめる

「見立てる」で、筆者の考えは文章の始まりやまとめに多いことを学習したので、ここでも始まりとまとめに着目させる。特に、⑩の「円柱形は強くて速い。」と、